

平成19年5月19日

次世代スパコン理研案評価

理研側からの説明の問題点は、折衷案を、評価委員に、提案の内容ではなく、メーカー育成とか経費の問題で合格にして欲しい、と要望している点にある。このやり方の一番の問題点は、理研側から、その場で、「もう設定時期に間に合わないからこれをお願いします」などと、口頭でなされているだけのことであり、最終評価には、我々評価委員が「提案内容そのものを合格と判定したことになる」ことである。

まず、理研の主張している折衷案の問題点を挙げると：

1. 「3 PFLOPS の N+H 社の装置で、実効速度は世界一である」、と W 氏が主張している。それなら、Linpack のみではなく実効速度も最高の N+H 社の 10 PFLOPS マシンが最高ということになる。
2. ほぼ互角ということで F 社の案が了解されているが、1 の W 氏の発言は矛盾している。Linpack などでは同等であるが、実際のプログラムでは N+H が優れているというのが、W 氏の説明であるが、その根拠が提出されていない。単に気象の計算で 3 PFLOPS が欲しいというだけでは、科学的な比較根拠とはなりえない。経験上、ナノ材料設計計算が特に F 社提案に向いているとも思えない。
3. ベクトル処理に合わせて作成した処理プログラムは当然 N+H 社の提案での実効速度が良いはずであるが、過去の資産をどこまで引きずるのか、という疑問は従来から出されている。また、ベンチマークテストの結果として、N+H 社案と F 社案に優位差がない、という理研側の説明にも矛盾している。
4. メーカー育成と言っても、膨大な赤字を想定している、との T 氏発言からも、1 社に絞り、なるべく集中投資すべきである。1 システム開発のみでも大変な状況で、2 システムの開発を行う、という現在の案では「メーカー育成」さえも難しい。次世代の話をするのなら、延命策が最大の重要事項であるとは思えない。

以上の様に、現在の理研案を、提案内容そのものとして認めることは委員会として問題であると判断いたします。提案書に書けない内容で、我々が判断してはいけません。将来、委員の資質が問われることとなった場合、責任を取れないからです。

東北大学
川添良幸